

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	不和の増幅装置としてインターネット：ハイデガーの技術論を手掛かりに
Author(s)	後藤, 雄太
Citation	HABITUS , 23 : 31 - 49
Issue Date	2019-03-20
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/47373">10.15027/47373</a>
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047373">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047373</a>
Right	
Relation	



# 不和の増幅装置としてのインターネット

## ——ハイデガーの技術論を手掛かりに——

後藤 雄太  
(広島大学准教授)

近さとは何であろうか。距離をせわしなく除去しようものなら、近さはかえって阻止されてしまうとすれば。(M・ハイデガー「在るといえるものへの観入」より)

### 序

本稿の目的は、インターネット技術が現代社会において人々の不和や断絶を深刻化させている側面があるという事実を示し、その問題発生を背景を分析したうえで、解決の展望を得ることにある。

まず第1節では、現代社会における具体的事例を挙げながら、インターネットが人々のあいだの不和や断絶を誘発し、増幅させるような役割を担っている現状を描き出す。

続いて第2節では、まず、ハイデガーの技術論を手掛かりに、科学技術の「本質」(Wesen)を問い、その本質はニヒリズムすなわち存在忘却であり、ゲ・シュテル(Ge-stell)であることを確認していく。次に、そのことを踏まえたうえで、現代社会に現出しているインターネット技術の「本質」を考究する。ネットもゲ・シュテルの一枝である。それは、人々を過剰に接近させることによって、皮肉なことに、互いの〈存在〉を忘却させるのである。

最後に、引き続きハイデガーの所論を参照しつつ、不和をもたらす技術文明の在り方からの解放の道を探っていくための展望を述べる。

## 1 インターネット時代における不和

### 1-1 仲間以外の他者を排除する装置としてのインターネット

まずは身近なケース、日本の若年層におけるネット利用から、考察を始めることにしよう。

近年、日本の若者たちにおけるネット依存的傾向——特にスマホ利用における——が社会問題として憂慮されている。このことに関連するデータを、いくつか挙げておこう。2017年度の厚生労働省研究班の調査によれば、ネットの使い過ぎで日常生活に支障をきたす「ネット依存」の疑いが強い中高生が全国で推計約93万人に上る<sup>1)</sup>。また、他の厚生労働省科学研究の調査によれば、平日に学業以外の時間で、中学生の5人に1人、高校生の3人に1人は、1日3時間以上ネットを使用しているという<sup>2)</sup>。特にヘビーユーザーの多い女子高校生にいたっては、1日に平均7時間ケータイ・スマホを利用しているという調査結果もある<sup>3)</sup>。なお、現在若者たちのあいだで最も頻繁に利用されているSNSであるLINE——これは、代表的なSNSの中でも最も閉じられた性質を有するがゆえに、内輪の人間関係を構築・維持・強化していくことが極めて容易なのであるが——の利用者は、総務省の調査によれば、10代で71%、20代で80%に達する<sup>4)</sup>。

そもそも、彼らはなぜこれほどまでにネットに魅入られているのだろうか？それは、端的に言って、若年層にとってネットは友人との「コミュニケーション・ツール」だからである。近年の若者の傾向として、友人関係を非常に重視する傾向が指摘されているが<sup>5)</sup>、ネットは、友人とのつながりを維持・強化するため、若者にとって必要不可欠なメディアとなっている。殊にケータイ・ス

マホは、パソコン以上に個人に密着した端末であるがゆえに、親や教師をはじめとした他人の目の届かないところで、「無媒介に」「ダイレクトに」密接なコミュニケーションをとることを常時可能にした。SNS——その中でも特に密室性の高い LINE——が、若者たちに好まれている所以である。また、ネット依存のもう一つの主対象であるオンラインゲームにせよ、ひとりでプレイしている依存者は少ないという。依存者の多くは、単にゲームそれ自体だけではなく、ゲーム中での人間関係に魅入られているのである。非日常的な空間で、ともに戦ったり冒険することによって、プレーヤー同士の絆が深められていく。極めれば、「神」扱いされることさえある。こうして、特に現実生活に不全感を抱いている者にとっては、ネットゲームの世界こそが自分の本来の「居場所」になってしまう<sup>6)</sup>。

こうしたネット依存的傾向が、現代の若者をめぐる様々な問題に連動している。友人関係という「内輪」の世界に、彼らの時間とエネルギーを費やせば費やすほど、そのぶん「内輪でない人間や物事」のことは配慮の対象ではなくなっていくからだ。

例えば、あるベテラン教師の証言によれば、昔に比べ、クラスがひとつにまとまりにくくなっているという<sup>7)</sup>。子どもたちは小集団に分断し、他の集団の者とはほとんど交流しない。そればかりか、集団間には、いわゆる「スクールカースト」という不可視の差別的階級制度が存在する。そこにおいては、空気を読める、ノリがいい、話が面白い、人気がある、といった「コミュニケーション能力」の高低に主に依拠して、上下関係が暗黙の裡に決定されるという。

視線を学校外に転じてみよう。近年社会問題にもなっている「歩きスマホ」は、内輪のことにしか関心が向いていないことを最も分かりやすく示す象徴的な事例であろう。なぜなら、彼らは、公共空間を共にしているはずの他の通行者をあたかも「存在しない」かのように見なしているからである。また、SNS

における悪ふざけの投稿や誹謗中傷、個人情報への安易な書き込みにしても、投稿者は「仲間しか閲覧していない」と思い込んでいるから、あのように軽率な投稿をしてしまうのだろう。しかし実際には、ネット上には「仲間以外の様々な人間」が数多く存在している。それゆえに、時に「炎上」をまねき、投稿者の個人情報が晒されてしまったり、警察沙汰になったりするわけである。

ところで、以上のようなネットの排他的効果は、日本の若者のみならず、アメリカの若者にも見受けられる。ただし、日本の若者における友達グループの分断化・階層化の基準が、「コミュニケーション能力」の高低にほとんど依拠しているのに比して、アメリカの若者においては、現実社会における人種・民族差別もまた大きく反映されやすい。社会学者のダナ・ボイドが指摘しているように、学生たちが SNS を通してつながっているのは、主に同人種の者である。現在アメリカ社会で深刻化している分断が、子どもたちの世界においても、ネット（とりわけ SNS）によって維持・強化されてしまっている<sup>8)</sup>。ボイドは言う。

私たちはしばしば、とりわけティーンのことを、新たなるコスモポリタン主義の恩恵をおおいに受ける者たちとみなす。しかしながら、ティーンにソーシャルメディアがどのように取り入れられているかを観察すると、インターネットが実際的にあるいは広範囲に及ぶかたちで不公平を解決していないことは明らかだ。ここで見られるのは、あまりにもよくあるパターンだ。偏見、人種差別、不寛容が染み渡っている<sup>9)</sup>。

1990年代のインターネット普及期、それは世界中の多種多様な人々との交流を可能にし、「グローバル・ヴィレッジ」を実現するメディアとして持て囃され

た。しかし、皮肉なことに——少なくとも現状を見る限りでは——ネットは「人々を小集団に分断し、内閉させていく」という正反対の役割を果たしてしまっているのである。

## 1-2 テロリズムの稼働装置としてのインターネット

さて、さらに広く世界情勢へと目を向けていこう。

現代の国際社会において喫緊の課題となっているテロリズムを可能にしている条件の一つは、インターネットである。前近代的なイスラム過激派の活動を支えているのは、これまた皮肉なことに、アメリカが生み出したインターネットという最新技術なのである。テロリストたちは、ネットの普及によって、もはや地理的制約を受けることなく、密接なコミュニケーションをとることができるようになった。ちょうど日本やアメリカの若者たちが小集団に分断されていたように、世界情勢においては、ネットの普及によって、1990年代から顕著になったナショナリズムや民族主義的傾向が強化されている。昨今社会問題の一つとなっているヘイトスピーチもまた、ネットの有する排他的効果が、その背景の一つとなっていると考えられる。こうした傾向を比較的早い時期から強調していたのは、社会学者の大澤真幸である。彼は、ベネディクト・アンダーソンの説く「ロング・ディスタンス・ナショナリズム」に想を得つつ、こう述べている。「マーブル・チョコレートのように不均一でばらばらで、いわばモザイク模様のような、そういう細かい共同体に分割された世界にこの社会は向かっている」<sup>10)</sup>。

イスラム過激派、殊に IS は、インターネットをはじめとするメディアを実に巧みに活用していた。彼らは、メディア宣伝部隊「アルハヤト・メディアセンター」を擁し、洗練された映像や雑誌をネット配信していた。それらは、巧みに人々の関心を引きつけることによって、各国のマスメディアや SNS を通し

て、さらに「拡散」していった。特に、彼らの代表的な「作品」とも言える人質の斬首映像は、欧米の人々の心のうちに「無媒介に」「ダイレクトに」入り込み、内部から彼らを心理的に揺さぶるとともに、イスラム教徒の一部に溜飲を下げさせ、支持を集める効果をもたらした。彼らの「作品」は、綿密な演出・脚本・カメラワークによって作りこまれており、ハリウッドの映像技法の影響が見受けられる——ここでも、皮肉なことに、「アメリカが生み出した技術」が存分に活用されているのである<sup>11)</sup>。

そして何よりインターネットは、世界中の同調者をリクルートしたり、育成したり、指示を出したりすることもまた可能にした。もはやテロリストになるために、必ずしもシリアに渡る必要はなくなった。いわゆるホームグロウン・テロリストの誕生である。例えば、2015年11月のパリにおける同時多発テロや、2016年3月にブリュッセルで起きた連続テロ、同年7月にバングラデシュのダッカで起きた人質立てこもり事件の犯人たちは、ホームグロウン・テロリストであり、ISから指令を受けたり、訓練を受けていた。

さらに、2016年7月にフロリダで起きた銃乱射事件、同月にニースでトラックが花火の見物客に突っ込んだ事件、そしてドイツの音楽フェスで起きた自爆テロのケースにおいては、いずれも犯人は、ISと直接的な接触は持っていないものの、主にネットを通して感化されていた単独犯、いわゆるローン・ウルフ（一匹狼）型のテロリストであった。今や、彼らのように、ネットを通してISに「私淑」する「個人」が、テロのための組織への加入や組織の編成といった手続きさえショートカットして、「ダイレクトに」破壊行動へと進み始めているのである。こうしたタイプのテロは、その「密室性」ゆえに、予期が極めて困難であり、各国を悩ませている（事件後、決まって聞かれる家族や知人の証言は、「犯人が、まさか過激思想に関心があるなんて思いもよらなかった」という類のものである）。こうした密室性を可能にしているのは、もちろんインター

ネットであり、モバイル端末である。

## 2 インターネット技術とニヒリズム

### 2-1 技術の本質 —— 存在論的ニヒリズム

以上、現代世界におけるネット利用の現状について、なるべく広い視野から素描を試みてきた。

この節では、視線を脚下の深みへと転じ、ネット技術の「本質」について、ハイデガーの技術論の助けを借りつつ、考察を試みたい。

まずは科学技術それ自体の「本質」について。ハイデガーによれば、科学技術とは、よく言われるように「中立」などではなく、その本質からして、ある種の暴力性をすでに胚胎している。彼は、1949年のブレーメン講演で、こう言っている。

科学的知識はその領域、つまり対象の領域において強制力をもっているが、ディング(もの Ding)をディングとしてはとっくに虚無化してしまっている。これは、原子爆弾が爆発した時点よりもずっと前からそうなのである。原子爆弾の爆発とは、ディングが虚無化されるという事態がとっくの昔から生起してしまっていることを確証するあらゆる粗暴な証拠のうちの、最も粗暴な証拠でしかない<sup>12)</sup>。

この発言を理解する際の前提となるハイデガーの存在史観を、図式的にはあるが、簡単に振り返っておこう。かつて、ソクラテス以前のギリシャにおいては、存在者はディング<sup>13)</sup>として、おのずから輝き現れていた。たとえば、瓶(Krug)というディングは、水を取め、注ぎ贈り与える。そして、その水には泉が宿り、泉には天空と大地が宿っている。天空から大地へ雨として降り注ぐ水



は「死すべき者」である人間の喉を潤すことだろう。死すべき者たちはまた、神的なものへと瓶から水を捧げることもあるだろう——このように、各々のディングは、各々のディングを集約し、この世界そのものを映現している。

ところが、中世になると、存在者は神という創造主体による「被造物」となってしまう。さらに近代では、存在者は、認識主体に対して立てられた「対象」(Gegenstand)となる。そして遂に、現代にいたっては、存在者は、人間によって用立てられうる限りにおいて存在が許される「用象」(調達物、在庫 Bestand)へと下がり、科学技術が支配する時代となる。現代は、「存在忘却」「存在から見棄てられた状態」の推し進められた時代であり、ハイデガー的意味におけるニヒリズム——すなわち、ディングがディングとしては虚無である状態——の極まった時代である。世界大戦は、存在論的ニヒリズムの分かりやすい顕れの一つに過ぎず、戦後の「平和」とされる時代にあっても、この技術文明のうちに、いまだその存在忘却=ニヒリズムは伏在し続けている。現代技術は、存在の〈近さ〉を封じ、私たちから存在を遠ざけている。

周知のように、ハイデガーは、現代技術の「本質」(Wesen)を「ゲ・シュテル」(Ge-stell)という日常語で名付けている<sup>14)</sup>。それは、存在者を対象として顕現させ用立てる働きの本質をいう。今や自然も人間も、このゲ・シュテルという根本動向に挑発され、強要されることによって、徴用物資として役立てられる限りにおいてその存在が許容される。あらゆる存在者は、ゲ・シュテルを構成する、取り換え可能な「断片」へと下がる。科学者自身さえ、決して自然の支配者ではない。彼もまたゲ・シュテルを構成する「断片」、いわゆるビッグサイエンスのための「用材」へと成り下がっており、社会や自然全体からは隔離されてしまっている。

ハイデガー技術論を特徴づける用語の一つである「召集」(Gestellung)や「徴発」(Anforderung)は、まさに戦争用語そのものであるが、このことは、科学技

術というものが、本質的に暴力的な要素を含んでいることを示唆している。ハイデガーは、現代を「原子時代」(Atomzeitalter)と随所で呼称しているが、単に核爆弾のみならず核エネルギー技術全般が、ゲ・シュテルの支配する現代を象徴するような破壊的技術であることを、彼はその天才的な哲学的嗅覚によって探り当てていたのである。

文化人類学者の中沢新一は、ハイデガー技術論にも触発されつつ、エネルギーゴロジー(Energology)、すなわち「エネルギーの存在論」の名のもと、核技術について、以下のような興味深い指摘をしている。核分裂連鎖反応は、本来ならば地球上の私たちが住まう生態圏では起こり得ず、太陽圏において起こっている物質現象である。原子力技術は、生態圏の外部に属するはずの物質現象を、私たちの「近く」へと、すなわちこの地上の生態圏へと「無媒介に」「ダイレクトに」持ち込み、エネルギーを強引に取り出そうとする点に、際立った特徴を有している技術である<sup>15)</sup>。

もともと、核技術が排出する放射性物質は、この地上のわずかばかりの生態圏には回収しきれないものである。太陽エネルギーは、一定の「距離」「隔たり」があつてこそ、地上に恵みを贈り与えるものたりえ、私たち生き物にとって、親密なものでありえていた。ディングの哲学に沿って言えば、太陽はすでに個々の存在者のうちに映現し、本当の意味で〈近いもの〉だった。にもかかわらず、私たちは、いわば「人工の小太陽」を作り出し、太陽との「距離」「隔たり」を除去し、あたかもわが物かのように所有し用立てようとすることによって、それを決定的に遠ざけてしまうのである。すなわち、核技術は、私たちの住処たる生態圏の「調和」を乱し、「不和」をもたらすものである。

そのことが露わになったのが、原子爆弾の投下であり、原発事故である。「平和」という目的達成のための「手段」として、核エネルギーとヒロシマ・ナガサキの市民たちが用立てられ、人々の住処を荒廃させた。続いて、フクシマに

においても、原子力の「平和」利用のためのはずの原子力発電所が、人々の住処を荒廃させ、数多くの「難民」<sup>16)</sup>を生み出してしまったのは、記憶に新しいところである。太陽エネルギーの疎遠さが襲い掛かる。フクシマの巨大な棺の中では、私たち人間の「挑発」の結果である放射性物質——自らの還り道を失った存在者たち——が、あたかも復讐するかのよう、自らの存在を主張し続けている。

## 2-2 ゲ・シュテルの構成要素としてのインターネット

### ——ニヒリストたちの召集

さて、私たちの目下の課題であるネット技術に視線を戻そう。

ハイデガーの技術論的観点から見て、現代社会においては、少なからぬ若者たちが、ネット技術によって「召集」されていると言える。前節で素描してきたように、その技術は、仲良しグループ、同人種、同イデオロギーを持つ者等といった「似た者同士」を密に接近させている。

こうした人間関係の内閉化・断片化の一要因として、現代社会は、自己の存在に対して肯定感を得られにくい社会、いわゆる「社会的包摂」の弱化した社会になっていることが挙げられる。かつての日本社会ならば、その倫理的是非は置いておくとして、何らかの社会的役割——例えば「武士」「農民」「一家の主」「正社員」「父」「母」等々——をきちんと果たしさえすれば、社会との一体感、ひいては自らの存在価値や人生の意味を獲得しやすかった。欧米社会ならば、無論キリスト教の「神」が与える存在承認も重要な役割を果たしていただろう。

しかし、現代では、そうした社会体制が揺らいでおり、ニーチェ的な意味におけるニヒリズム——すなわち「神の死」「価値喪失」といった意味でのニヒリズム——の時代となっている<sup>17)</sup>。今や、世界はあまりに疎遠であり、自己の存

在価値は容易には感じ取られない。それゆえに、少なからぬ現代人たちが、自己不全感を抱き、他者からの存在承認を渴望するようになってしまった。そして、学生たちのネット依存の事例に見られたように、ネットは、承認飢餓状態の若者たちに「つながり」「絆」をもたらすものとして機能しているわけである。

こうしたニーチェ的ニヒリズムを解決する手段としてのネットの機能を、好意的に見る向きもあるだろう。しかし、すでに前節でいくつかの事例を挙げたように、ネットという技術がむしろ世界における不和、断絶を増幅させるといった皮肉な事態が起きている。

その原因は、ネット技術の有する「過剰に接近させる性質」にあると思われる。この性質は、以下の二つの仕方で他者を排斥してしまう。

まず一つ目の排斥の仕方は、自分の仲間以外の他者、自分たちの〈外〉の存在者を敵対視する、もしくは単なる「風景」としてその存在を無視する、といった排斥の仕方である。自分の仲間内だけに配慮のエネルギーが集中される結果、当然のことながら、外部の存在者には配慮が行き渡らなくなる。そればかりではない。仲間内の結束を強めるために、むしろ進んで共通の「敵」を作り上げ攻撃するのは、集団心理の常であろう。

次に二つ目の排斥の仕方について。ネット技術の「過剰に接近させる性質」は、内部の人間、自分の「仲間」の一人ひとりさえ無化してしまう。「空気を読む」「ノリに合わせる」「上から目線にならない」等といった現代日本の若者において重視される人間関係のマナーに象徴されているように、そこでは互いに「同じであること」が過度に重視されている。しかしながら、「似た者同士」である仲間ですえ、本来は各別各異の存在者であって、決して同一の存在者ではない。にもかかわらず、同調圧力のもと、互いの〈遠さ〉自体を除去しようとするれば、一人ひとりの存在は無化し、〈関係〉それ自体が消失してしまう。そこに残るのは、のっぺらぼうのような世界だけである。教育学者・内藤朝雄の言

葉を借りれば、彼らの多くには「仲間はいても、友達はいない」<sup>18)</sup>。いわゆる「SNS 疲れ」の現象に見られるように、少なからぬ若者が、こうした現状に内心嫌気をさしている傾向も見受けられるが、それは彼らとて、個の無化の脅威を無意識のうちに感じ取っているからであろう。過剰な同一化は、個性的な人間、異他的な他者への不寛容をもたらし、「いじめ」の一要因にもなっており、若者の生活環境を過酷なものにしている。

「遠さの制覇」のためのネット技術が、皮肉なことに、他者の存在を無化していく。他者は他者として立ち現れない。そこにはもはや、〈近さ〉も〈遠さ〉も生じない。ハイデガーは言う。

距離をいくら思いどおりに支配したとしても、近さはどこにも生じない。近さといっしょに遠さも脱落してしまう。すべては平板化され、隔たりを欠いたものになり下がる<sup>19)</sup>。

他者は、「自己確保」のための素材として役立つ「用象」になり下がる。「仲間」はもちろん、「敵」もまた、自己愛を亢進するための材料として「用立て」られる。人々は、とりわけマスメディア等を通して「孤独はみじめだ、異常だ」と不安を煽られ、「挑発」され、果て無き交際へと駆り立てられる。そして、いくらつながり続けても不安はやまず、より深く依存させられていく。こうして彼らは、携帯キャリアや IT 企業、ゲーム会社のために動員され、用立てられ、彼らに豊かに贈り与えられているはずの時間やエネルギーが収奪される。いまだ国家が執着し続ける「経済成長」のため、用立てられ続ける（ちなみに、この資本主義社会を永久に稼働させるエネルギー源として用立てられようとしているのが「人工小太陽」である原発である）。

ゲ・シュテルは、私たち大学人も見逃してはくれない。周知のように、まさ

に「役に立たない」との理由から人文科学削減の風潮が強くなっているが、これも大学がゲ・シュテルに取り込まれている証左であろう。学生たちが書物を紐解き、思索家や詩人たちの〈コトバ〉を聴く機会はますます乏しくなることだろう。学生たちの言語世界は、経済的利益をたたき出すための「データ」や「数値」、そして自己愛を満たすための「つぶやき」や「スタンプ」で埋め尽くされることになるだろう。そして彼らの思索(Denken)は、「クリティカル・シンキング」へと痩せ細るだろう。

以上、ネットによる先進国の若者の「召集」の様子を見てきたが、さらに深刻なことには、ISのケースに見られるように、世界の若者たちが戦闘員・テロリストとして、文字通り「召集」され始めている。

若者たちがテロリストになる背景は様々ではあるが、その根底に共通して見受けられる動機は、「社会からの疎外感」であり、それゆえの社会への強い敵意である。

例えば、テロリストには、移民第二世代・三世代が多い。彼らは社会的差別を受け続け、そのことが国に対する深い恨みにつながっているケースが典型的である。すなわち、この社会を「居場所」とは感じられない人々である。その多くは、軽犯罪を経験しているような、社会からの「はみ出し者」である。

また、特に差別を受けておらず、経済的にも貧しくなくても、少なからぬ若者が、先にも言及した現代社会特有の自己肯定感の欠落状態にあり、満たされることのない承認願望が、社会への破壊願望——要するに、「自分を受け入れないのなら、自分もお前たちを受け入れない。みんな消えてしまえ」という願望——へと転化しているケースも典型例の一つとして見受けられる。いずれにせよ、テロの背景に共通して見いだせるのは、自己の存在価値を実感できないという、ニーチェ的な意味でのニヒリズムであり、このニヒリズムから抜け出す

ために、社会を攻撃することによって反動的に自らの存在価値を獲得しようという切望である。実は、歴史を顧みても、もともとテロリズムとニヒリズムは関連が深い。たとえば1860-70年代の「ロシア・ニヒリズム」は、ツァーリズムへの政治的反抗、テロ運動のことを指しているが、その主な担い手は、キリスト教をはじめとする旧来の価値を信じず、積極的に社会を破壊しようとするインテリゲンチヤたちだった（ちなみに、このロシア・ニヒリズムこそが、ニーチェのニヒリズム論の源泉の一つになっている）<sup>20)</sup>。また、日本における日本赤軍やオウム真理教によるテロリズムの背景にあったのも、この社会を自らの「居場所」とは感じられず、自分の存在価値を求める「自分探し」であったように思う。

ISによるテロの根底にあるのは、実のところ、宗教や思想上の理由などではない。ISに参加しているテロリストたちの多くは、イスラム教自体には何の関心もなく<sup>21)</sup>、過激派への参加後の改宗者も少なくない。

また、よく指摘されているように、ISの思想それ自体は、何ら独自性を持たず、彼らの内奥から湧き出してきたものとは言えない。それは、単にテロを正当化するための「大義」として、イスラム聖典から「カット&ペースト」された代物に過ぎない。すなわち、彼らにとっては、イスラム教の教えさえ、テロのための「用材」のひとつである——ここでも、イスラム聖典が発している〈コトバ〉は、もはや聴き取られることはない。

社会から疎外された者たち——より根源的には、〈存在〉から見放された者たち——が、過激派組織によって「召集」され、時に自爆装置として「再利用」されている。彼ら自爆装置たちは、社会に復讐し、他者の存在を消去し、その反動の力で自らの生と死に「価値」「意味」を付与しようとする。

彼らテロリストという（一見すると）私たちに最も疎遠なる者たちは、今や物理的にはむしろ私たちの「隣人」として、私たちのごく〈近く〉にいる。私

たちの日常生活の場が、突如「戦場」へと転化しはじめている。パリが、ブリュッセルが、イスタンブールが、ダッカが、文字通り「炎上」する。

自国の「外部」へと足繁く出かけ、民間人たちを巻き添えにしつつ空爆しても、テロリストたちを殲滅しようもなかったのだ。なぜなら、テロリストたちは、私たちの隣人——もっと言えば、私たち自身の「影」であり「もう一人の、ありえた私」なのだから。なるほど、シャルリー・エブドやパリは「私」(je)かもしれない。しかし、テロリストたちもまた「私」だとしたらどうか？ 「私」の存在の内奥にテロリストが映現している。また、テロリストのうちにも「私」が宿っている。

インターネットは、私たちとテロリスト——それぞれの仕方で〈存在〉に見棄てられた者同士——を接近させ、邂逅させ、殺し合いへと向かわせる装置のひとつとして稼働している。多くのテロリストが「自爆」という手段を進んで選択するという事実は、示唆的である。もちろん、一義的には、先述したように「殉教」することが、彼らの存在の「価値」を最高度に高める（と錯覚されている）ことにあるが、それだけではないようにも思われる。彼らニヒリストのほとんど無意識に近いところで望まれているのは、相手も自らも共に消し去ることによって、両者が遂に虚無のうちに合一することである。そこにはもう差別も争いもない絶望的な仕方での合一である。自爆によって、破滅的な仕方、まさに「すべては平板化され、隔たりを欠いたものになり下がる」。

そして今、テロリズムは、核エネルギー技術とも邂逅しようとしている。すなわち、原子力発電所が、テロの兵器として「用立て」られようとしている（いわゆる「ダーティー・ボム」の問題）。ヒロシマともフクシマとも異なる仕方、私たちの住処→エートスが荒地へと転化しようとしている。核の閃光の中の破滅的合一——そこにはもう、互いの〈近さ〉も〈遠さ〉もない。



## 結びにかえて ——ゲラッセンハイトについて

ハイデガーは、技術文明からの解放の手かかりも漠然とではあるが提示している。その手かかりとなる〈コトバ〉の一つが、マイスター・エックハルトの哲学から借りてこられた「ゲラッセンハイト」(Gelassenheit)である。それは、技術文明に飲み込まれてしまうことなく、そうかといって技術文明と完全に断絶してしまうのではないような姿勢を意味する<sup>22)</sup>。本稿の関心事である〈距離〉論的な観点から言い換えれば、ゲラッセンハイトとは、存在者に対する近代的な「認識」「所有」「管理」モードを解除し、〈一步引き下がる〉ような姿勢であり、存在者の存在の〈遠さ〉、すなわち〈深-淵〉(Ab-Grund)、〈拒み〉を自覚することを通して、そのものをそのものたらしめるような姿勢である。要するに、存在者との「ほどよい距離感」を保つような——やまと言葉で表現するなら、互いが完全に同一でも別異でもないような〈あわい〉を空け広げるような——姿勢である。

こうした思想を、ハイデガーは随所で仄めかしているが、具体的な方策は遂に語られていない。「方法」という発想自体が近代的であるということには注意を払いつつも、今後、ハイデガーの解決策を一步進めることを試みるなら、フーコー的な「自己のテクノロジー」との接続が考えられる。古代ギリシャ哲学に依拠するハイデガー哲学が、やはりどこか観照的な性格を残しているのに対して、古代ローマ哲学に依拠する後期フーコーは、「自己への自己の働きかけによる自己の変貌」のための実践を掲げている。

また、日本のハイデガー研究者の多くがゲラッセンハイトの訳語に当てている「放下」は、もともと禅仏教に由来する言葉である。仏教のなかでも特に「行」を重視する禅の実践哲学のなかにも、近代的な自我とは異なる自己の在り方へと変貌する道に関する手かかりを読み取ってみたい。

[付記]本稿は、Yuta Goto, *The Internet as the Amplification Equipment of Discord: An Approach from Heidegger's Theory of Technology, Praxis*, vol.18: 39-48, 2017 を日本語訳し、内容の一部を改変したものである。

## 註

- 1) 尾崎米厚（研究代表者）「飲酒や喫煙等の実態調査と生活習慣病予防のための減酒の効果的な介入方法の開発に関する研究」、2018年参照。
- 2) 大井田隆（研究代表者）「H24年度 喫煙飲酒全国調査結果」、2013年参照。
- 3) デジタルアーツ株式会社「未成年の携帯電話・スマートフォン利用実態調査」  
<http://www.daj.jp/company/release/common/data/2015/020901.pdf>（2017年1月15日）、参照。
- 4) 総務省『平成26年版 情報通信白書』、2014年参照。
- 5) 後藤雄太「ネット依存が道徳性の発達に与える影響」『北海道情報大学紀要』第27巻 第1号、2015年参照
- 6) 遠藤美季・墨岡孝『ネット依存から子どもを救え』光文社、2014年、および、樋口進『ネット依存症』PHP新書、2013年参照。
- 7) 堀裕嗣『スクールカーストの正体』小学館新書、2015年、101-102頁参照。
- 8) cf. danah boyd, *It's Complicated: The Social Lives of Networked Teens*, Yale University Press, 2014, chap.6（『つながりっぱなしの日常を生きる ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの』（野中モモ訳）草思社、2014年、第6章）。
- 9) *ibid.*, p.159（邦訳 259頁）。
- 10) 大澤真幸「電子メディアの共同体」『メディア空間の変容と多文化社会』青弓社、1999年、53頁。
- 11) 池内恵『イスラーム国の衝撃』文春新書、2015年、第7章、参照。
- 12) Martin Heidegger, *Gesamtausgabe 79: Bremer und Freiburger Vorträge*, Frankfurt

am Main: Vittorio Klostermann, 1994, S.9 (『ブレーメン講演とフライブルク講演 (ハイデッガー全集 第79巻)』(森一郎、ハルムート・ブフナー訳)、創文社、2003年、12頁)。

13) Ding は「もの」や「物」と訳されることが多いが、本稿ではそのままカタカナ表記することにする。

14) Ge-stall に関しても、「集-立」(辻村公一、他)、「立て-組」(小島威彦、アルムブルスター)、「巨大-収奪機構」(渡邊二郎)、「総かり立て体制」(森一郎、H・ブフナー)等、様々に工夫を凝らした訳が試みられているが、本稿ではカタカナ表記することにする。

15) 中沢新一『日本の大転換』集英社新書、2011年参照。

16) さらには、「難民」の子どもたちが、避難先の学校でいじめを受けてさえいる。この件を含め、原発事故がもたらした諸結果は、原発事故と「戦争」とのあいだに大差はないことを示唆している。

17) ニーチェにおける「ニヒリズム」という言葉の意味については、後藤雄太『存在肯定の倫理 I ニヒリズムからの問い』ナカニシヤ出版、2017年、第2章参照。

18) 内藤朝雄『いじめの構造 なぜ人が怪物になるのか』講談社現代新書、2009年、72頁。

19) Heidegger, Bremer und Freiburger Vorträge, S.24 (邦訳 32頁)。

20) 後藤『存在肯定の倫理 I ニヒリズムからの問い』、10-14頁参照。

21) 政治学者オリビエ・ロワへのインタビュー記事「過激派のイスラム化」『朝日新聞』2016年6月11日付、参照。

22) エックハルト自身の実践哲学においても、世俗と完全に断絶した隠遁生活ではなく、世俗の中で活動しつつも、外的なものに執着しないような「距離」の取り方が強く勧められている。

**The Internet as an amplifier of discord:  
An approach using Heidegger's theory of technology**

Yuta GOTO

Associate professor, Hiroshima University

The current article sought to examine situations in which Internet technology exacerbates discord and divisions among people, while analyzing the factors causing this phenomenon and presenting a vision for a potential solution. Section 1 describes the present situation, in which the Internet is playing a role in triggering and amplifying discord or divisions among people internationally, with several real-world examples. In the 1990s, when Internet adoption became widespread, the Internet was widely praised as a tool for enabling communication among a diversity of people all over the world, enabling a “global village”. However, the Internet is currently considered to have the opposite in some circumstances, playing a major role in dividing people into small closed groups. Section 2 questions the “essence (Wesen)” of scientific technology, revealing that the essence is nihilism, or “positionality(Ge-stell)”, in Heidegger’s theory of technology. Based on this notion, the article considers the essence of Internet technology as it manifests in modern society. Internet technology is part of Ge-stell. From the viewpoint of Heidegger’s theory of technology, many young people are “called up” by Internet technology. The technology enables people to easily access similar types of people, such as friends, people of the same race, or people with the same ideology. However, Internet technology for “overcoming distance” can, ironically, nullify the existence of others. Finally, referring to Heidegger’s theory, the article discusses a vision for moving beyond a technical civilization that creates discord.